



浄者神奈川

大本山光明寺法主宮林昭彦台下御染筆

神奈川浄青機関紙
No.28
発行責任者 宮林雄彦
発行 浄土宗
発行日 平成13.7.4



「邂逅創心」 かいこうそうじん

2年目を迎えて

浄土宗神奈川教区青年会
第13代会長 宮林雄彦

聖号十念

昨年(かいこうそうじん)の総会に於きまして会長の大任を仰せつかり、早一年が経過いたしました。この間、会員・諸上人のご尽力により、お蔭様を持ちまして、諸事業を順調に展開することが出来ました。改めまして心より御礼申し上げます。

さて、今期は運営テーマを「邂逅創心(かいこうそうじん)〜であいが心(こころ)を創る」といたしました。「であいは人にいろいろな変化をもたらします。浄青に於ける「であい」は、将来、一浄土宗僧侶として自坊での教化活動をする上で必ずや大きな財産となるであります。そこで、今期は今までの浄青活動のノウハウの蓄積を最大限に利用し、様々な事業展開をさせていただきましました。これは、ともすると一部の会員だけで活動してしまいがちな浄青事業に、百三十五名に及ぶ会員の一人でも多くが関われるようにということから、用意させていただいたものであります。今期を特徴付ける事業としては

- ① 教区主催の夏期僧堂への企画面での参画と運営への協力
- ② 私どもと同世代の青年を対象とした婦敬会の開催
- ③ 大本山光明寺に伝来する引声法要の研修とその成果を携えての北米開教区での引声法要

の奉修

④ 海外の仏教国の子供に対する支援

という四つの事業があげられます。この遂行については、各組より委員選出し委員会を新たに設けました。そして、従来よりの広報事業を担当する編集委員会と合わせ五委員会にて事業を展開した次第であります。平成十二年度におきましては、このうち①と②について開催し、③と④については二年間に渡る通期の事業として平成十三年度に終結いたします。

これらを顧みますと、「夏期僧堂」では今回特に構想の段階から参画し、委員会が発案した企画(カレー作り等)を取り入れた形で実施いたしました。また、運営メンバーが浄青会員であることから、人員配置等の運営面にもタッチし、児童教化事業の実践として大いに会員の研修にも貢献いたしました。

次に「婦敬会」では今回斎藤(匡)実行委員長以下委員会のメンバーにより、一日という短い時間ではありましたが、平均年齢二十代・三十代の四十七名もの青年の参加を得て、内容の濃いものが開催できました。今回勧誡師には受者が青年層ということで高校教師の経歴をお持ちの三浦組慶野上人をお

願いし、また婦敬式では受者に阿弥陀様に直面していただき、教授師のみの進行で戒師を置かないという新しい形式を採用いたしました。受者からはお話がわかりやすく婦敬式も感銘を受けたとの感想でした。また継続事業として「北米開教区引声法要奉修」事業においては、昨年度は杉浦実行委員長の指導により主に引声法要の研修を努めました。本年九月にはお参りし、あの別院に引声の節を響き渡らせたたいと願っています。ぜひ大勢の皆さんのご参加を宜しくお願いたします。そして「海外仏教国支援」では、平元実行委員長の熱い思いを承けて、タイ国山村の小学校に校舎を寄贈するという事業を実施することになりました。来年の二月完成に向けて会員全員の気持ちの結集した事業にすべく浄財を賜る活動を興しております。最後に編集委員会で、今期よりこの対外誌「浄青神奈川」に加え、会員相互の交流を図るべく対内紙を年三回発行、ホームページも立ち上げるなど、精力的に活動しております。

本年度は、今まで準備に準備を重ねたものを具体的な形にしていきたいと思っております。青年会のもつパワーを発揮し、「自行・化他・和合」の精神で具体的な行動をしていく所存です。私たちの持つ光は小さく弱々しいものですが、集まることにより少しは世の中を照らすことが出来るのではないかと考えています。荒削りな部分は多々ございますが、皆様のご協力により是非成功させたいと存じておりますので、本年度もご支援のほど、よろしくお願いたします。合掌



法友の輪をひろげよう

大本山光明寺第百十二世法主

宮林昭彦 台下

この度憚らずも、大本山光明寺第百十二世の法灯を継承することと相成り、四月十七日入山致しました。

わが身の至らなさを思うとき、忸怩たるものがありますが、三祖良忠上人の思召しと存じ不徳を省みず、不惜身命の思いで報恩に酬ゆる所存であります。昔、中学生の頃、信州善光寺のある老僧から、生仏法師と三祖上人のことを伺ったことを思い出します。それは生仏法師が、信州善光寺如来の靈告をうけて、三祖上人を誘って二祖鎮西上人のもとに、九州の地へ出向かれたこと、生仏法師と三祖上人の出会いが友情につながれ、如来さまに導かれて、三祖上人三十八歳、二祖上人七十五歳のときに

対面されたのであります。それから一年間二祖上人のもとで求道され法然上人より選択本願念仏の法灯をうけられた二祖上人

は、念仏の真髓を、とくに浄土門の奥義が相伝されました。なかでも二祖さまの『末代念仏授手印』の「血脈を白骨に留め、口伝を耳底に納めて」の言葉は、三祖上人の心底深く刻まれ、『領解末代念仏授手印鈔』をあらわされ、二祖上人より「わが法は然阿に授け畢ぬ、法灯何で消えん」といわしめ印可されたのであります。

法灯が継承されるということは、只単に人為的な出会いだけでなく、目に見えない冥加がはたらいてこそ体得されるものであります。三祖上人は法友、生仏法師との出会いが機縁となり善知識となつて、二祖上人に導かれたことは、人の出会い、めぐり合いの尊き不思議さを感じます。

浄青の若き友垣が法友の輪をひろげ、念仏弘通の大いなる力とならんことを期待して御挨拶いたします。



使命感に生きる

神奈川教区教区長

成田光俊 上人

浄青の方々には、常々教区行政にご協力いただき且つ、ご活躍されておりますことお慶び申し上げます。

光徳の歌に「今日ありし姿いずれの因縁と 手をば合せる時ぞ尊し」というのがあります。私たちがこの世に生を受けたのは、親の縁とともに大きな恵みの因あればこそと気付き、生かさせていただく日々感謝しての日暮らしが大切です。テレビの画面で、新聞の紙上で騒がれている事件も、この生かされていることに感謝する心に欠けていることも要因かと思えます。そこに視点を向けた教化も大事です。

私はここ数年、ミャンマー、カンボジアなどを訪ね、その度に、まだ日も登らない薄暗い町々を托鉢に向う僧侶の姿に何度か出会いました。その集団の方々、誰れもが生れ育った場所や

環境は異なるとはいえ、いま己の使命にめざめ道を求めています。浄青の活動も同じでしょう。活動の中心になつていらっしゃる中にかつて夏期僧堂で出会った方々がいられます。懐かしいとともに、ここ数年で素晴しく成長された姿が本当に嬉しく思います。手を取り合い、使命に全力を傾けてほしいと思います。

アジアの村に学校を造る運動もされているとのこと……私もエンピツも無い村々を訪れたことがあります。私たちは不自由なく生活していますが、物のない不自由さのなかで目を輝かせて勉強している子どもたちを沢山みて、あらためて物の大切さを知りました。浄青の方々も、手を取り合い助けあって、実情にしつかりと目を向けて前身されることを期待します。

幸せは お蔭げよろこぶ心から 合掌



大本山光明寺
第百十一世法主
戸松啓真台下

大本山光明寺第百十一世法主

戸松啓真台下遷化

浄土宗神奈川教区青年会顧問をおつとめいただいた、大本山光明寺第百十一世戸松啓真台下が、去る平成十二年十二月二十八日に遷化されました。長年に渡る御指導に深く感謝し、つつしんで御冥福を御祈り申し上げます。

合掌



高德院第十三世
佐藤密雄上人

高德院第十三世住職

佐藤密雄上人遷化

浄土宗神奈川教区青年会顧問をおつとめいただいた、高德院第十三世佐藤密雄上人が去る平成十二年六月十五日遷化されました。会員一同長年に渡る御指導に感謝し、つつしんで御冥福を御祈り申し上げます。

合掌



第5代会長野中岳道 上人を忍んで

浄土宗神奈川教区
青年会相談役
國松俊康

「晋山式だそうで、おめでとうございます。」

「おう、そうなんだよ。國松君は楽かな？」

「はい、下手くそですけど吹かせて頂きます。」

「いえいえ、ぜひ頼みますよ。」

この会話の四日後に、野中さんは突然お浄土へと旅立たれたからだ。享年五十六歳。あまりにも唐突で早すぎる遷化である。

野中さんは、今や伝説と化した神淨草創期からのメンバーであり、昭和五十九年に第五代神淨青会長に就任している。この頃私は淨青会員としてほんの駆け出しの一ヒラ会員であったが、野中会長が実行委員として指揮を執った「音楽法要」（昭和六十一年五月四日、大本山光明寺良忠上人七百回御遠忌法要の一環として奉修）の見事さは未だに脳裏に焼き付いている。当時としては目新しいシンセサイザーを導入し、聲明、雅楽・舞楽を法要に織り込んだ、それは実に斬新で幻想的な法要であり、照明の効果も相まって、光明寺大殿に極楽浄土を現出した。まさに野中会長渾身の一大ベージュメントであった。

ところで、野中さんと私は、



実際のには十四歳も年齢差がある、先述の通り、野中さんが会長の頃、私はまだそれほど淨青に関わってはいなかった。第五代神淨青会長」とい

野中さんの事はあまり詳しくはない。だから私のイメージする野中さんは、「気さく」で「いつも楽しい」普段着の「たけみっちゃん」としての野中さんがより強いのである。勿論、私は面と向かって野中さんを「たけみっちゃん」と呼んだ事はないが、まかり間違っても「たけみっちゃん」と口を滑らせたとしても、野中さんは「おう、何よ」と気軽に応えてくれたに違いない。とにかく野中さんは大らかで気のおけない方であった。今から思うとその「気さく」さ故に、大先輩に対して大層無礼な事も多々あったのではと背筋の寒い思いがする。

その「気さくで楽しい」野中さんが今はお浄土に居られるという現実を、私はなかなか実感できなかった。今でも「おう、皆な元気かよ」と言いながらひよっこり現れそうな気がしてならない。

本葬の日、遺影の野中さんは、「気さく」で「楽しい」いつもの「たけみっちゃん」だった。私は野中さんは「やっぱり、こうでなくっちゃ」と思った。いつまでも。

野中さん、お浄土よりご遺族を、そして私たち念仏の徒をお守り下さい。





4大事業①

夏期僧堂報告

子供達の笑顔が最高の財産!

夏期僧堂企画委員会

委員長 大橋定敏



7月28日から二泊三日の日程に於いて、第54回夏期僧堂が開催され、61名もの僧堂生が参加し天候にも恵まれ、神奈川教区、浄土宗青年会執行部また多数の浄土宗青年会会員の協力により、無事終了する事ができました。本年度は、主催は神奈川教区、企画・運営は浄土宗青年会が担当することとなり、4月に夏期僧堂企画委員会を発足し、昨年度までの夏期僧堂の内容を検討し、新たな企画を加え、本年度の夏期僧堂に臨みました。

会議を重ねる中で、楽しいだけの子供会ではなく、私たちが子供たちに僧侶として何が伝えられるか?という事を考え、まずは、指導目標を決定し、仏教の講和やお経の勉強、食事や掃除など、夏期僧堂のすべての企画を通して僧堂生に、「おかげさま」という何事にも感謝する気持ち、また三宝に帰依し「明るく・正しく・仲良く」ということを子供たちに伝えることを目標に据えました。そして新たな試みとして、僧堂生のカレー作りと写仏を加え、夏期僧堂を行うことになりました。

その中で、特にカレー作りでは、普段何気なく食べているカレーでも、自分たちで、食材を切り、調理する事によって、食事を作る大変さや、物を大切にすることを感ずてくれたのだと思います。そのことは、子供たちが少しもカレーを残さずに、一生懸命に食べる姿に現れていました。また子供たちと一緒にカレーを作っていると、いろいろなことを話していると、子供たちの料理の知識や、また家庭で良くお手伝いをしていている子供も多く、指導員が学ぶ事も多くありました。また写仏では、講和やお経の勉強という、受け身の企画が多い中で僧堂生が、自分のペースで積極的に参加出来るの出来映えは、何年生が書いたのが解らないくらいみんなが、がんばってくれました。これらの企画は、次回の夏期僧堂でも、引き続き行いたいと思います。

最後になりましたが、二泊三日を通じてけが人もなく無事に円成したことに感謝し、また夏期僧堂を手伝って下さった神奈川教区、浄土宗青年会の皆様に感謝致します。 合掌

邂逅創心

4大事業②

帰敬会開催報告

共に感動・礼拝に涙・念佛の声上がる!

帰敬会実行委員会

実行委員長 斎藤匡念

平成13年3月3日

13期神浄青事業の一つである「帰敬会」が開催され、我々と同世代の檀信徒中心の男女を対象に、50名が参加致しました。宮林会長の掲げた「邂逅創心」をテーマの元、如何にすれば、仏教・阿弥陀様との邂逅が受者にとって良き出会いとなり、阿弥陀様を身近に感じ、そして仏教は今を生きる人の為であり、明るいものであると実感し、この事業の成功に向けて皆で内容・演出等について納得の行くまで悩み、考えました。時には意見が食い違い互いに議論しました。特に当日受者が使う「しおり(パンフレット)」と記念に渡す「カード」作り、そして演出には時間をかけました。

その結果当日は、慶野上人の熱の入った判り易い講話、そして当日参加の浄青僧侶(32名)の真剣な気持ちや態度、姿勢が受者の念仏・礼拝、感想文にある「参加して本当に良かった」「また参加したい」の声に繋がったのだと思います。

法然上人の教えは、私共浄土宗僧侶が信念を持って真剣に伝道教化に勤めれば現代の若き人々にも共感されるものだという大きな自信となりました。





「であいぐでつなぐ」四大事業報告

4大事業③ ロッパに響かせ！神奈川の伝統

北米開教区引声法要奉修事業 現地調査及び経過報告

北米開教区引声法要奉修事業実行委員会

実行委員長 杉浦定徳

去る4月15日より19日の日程で、杉浦、渡部、都築、成田の実行委員会メンバーが、北米開教区浄土宗別院の現地調査のため渡米しました。宿泊先となっているホテルニューオオタニより実際に歩いて、徒歩による移動が可能かどうかと道筋を確認しました。別院の建物は、近代的な様式のなかにも浄土宗の荘厳さを兼ね備えた立派なものでした。本堂内陣も奥行に若干狭さを感じるものの、間口は十分な幅があり、22名の式衆が行道をするに支障がないことを確認しました。唯一難点をあげるとすれば、内陣が板張りであるため畳の縁でのライン取りが出来ない点です。この点については、十分な習礼をもってクリアしていきたいと思えます。また同時期に河合北米開教区開教総監が来日され、宮林会長と佐々木事務局長が会見しました。席上、例年9月9日に行なわれる彼岸法要の時間をいただいで引声法要を奉修することを確認。終了後は、別院の檀信徒の方々との会食をまじえての交流会を行なって頂けることになりました。

6月15日現在での経過としては、参加申し込み数39名中会員が35名、OB他4名となっております。実行委員会としては、団参での参加者をさらに募るとともに、OBや寺族の方の参加を呼び掛けていく方針です。習礼も現地調査において計測してきたスケールをもとに、実践形式の習礼が行なわれています。音声は言うに及ばず、威儀にも注意をはらって行なわれています。また、参加者の中で雅楽を研鑽している会員により、入退堂時に雅楽の演奏も行なうことになりました。何分経験の少ない浄青会員ではありますが、光明寺に伝わる伝統法要の名を汚さぬよう、真剣に取り組む姿勢を全面に出していくことを確認しながら鋭意習礼に励んでいます。さらに、この事業を通じて一人でも多くの方々に引声法要を知ってもらい、我々浄青会員が将来この法要の担い手となり、立派に伝承して行くことを願って止みません。



4大事業④

海外仏教国小学生 支援事業の現状

海外仏教国小学生支援事業実行委員会

実行委員長 平元正法

「どんなに小さな灯でも数が集まればまばゆいばかりの光となる」 神浄青会員一人ひとりが力を合わせる事によって、たとえ一人ひとりの力は微量であっても、それが一つの目標に向かってまとまったとき、大きなパワーとなつて具体的な形象となる。そんなコンセプトのもとこの事業は始まりました。会員一人ひとりが浄財を喜捨することにより、それが集まって大きなパワーとなるのです。

今年一月よりスタートした募金は、お蔭さまでOB会員五名を含む百二十余名より総計百二十万円を超えるものとなりました。全額タイ国プリラム地方の仏教系小学校、タンマ・メッター校に寄贈されます。

本年六月新校舎建設着工に先がけ、五月二十九日実行委員七名が現地に赴き、建設契約を取り交し又、地鎮祭を執行いたしました。来年二月には落成に伴い引き渡し式典を執行する予定です。是非この式典ツアーにご参加いただき、感動を共に分かち合いたいと思います。

会員諸師及び関係各位に対し改めまして厚く御礼申し上げますと共に今後ともご理解いただきますよう、よろしくお願いいたします。合掌



神奈川 特別対談

宮林 本日は、ご多用中にもかかわらず、お越し頂きありがとうございます。さっそくですが、最近東京から千葉にお引越したなさったそうで。

山崎 そうなんです。演劇は歩く速度でつくりまします。手作りだから、ゆっくりした時間がないと駄目なんです。東京だと情報が集まらなくて、稽古に集中できないんです。80年代は結構芝居も元気があったんですけど、90年代になると役者も製作スタッフも時間に追われちゃって落ち着いていない舞台を作れなくなっちゃったんですよ。

宮林 私も感じます。先生失礼ですけど、お子さんは。

山崎 待ちのぞんでいましてね。ようやく昨年生まれたんですよ。宮林 私も3人子どもがいますが、最近の子供たちは時間に追われている気がするんですよ。本人の希望という名のもと、親が色んな習い事をさせていますよね。また、行かせないと親も不安になってくる。子供を正しく育てることが理解できていないというか、そんな社会風潮が最近の痛ましい事件に繋がっているというか。

山崎 僕にとつて80年代ぐらいから一番の関心事が実は宗教だったんですよ。「イエスの箱舟」事件のころ、新宗教的なものが大きな社会問題で考えたんです。家族という基盤が危なくなつた時、人はどうしたら良いんだらうかと悩んでいたんです。そして答えを唯一出してくれたのが宗教の世界なんです。しかしその受け入れ先の宗教が歪んでいました。その典型がオウム事件と考えています。僕は演劇で、若い世代と接する機会が多いんです。演劇の世界に入ってくる若い人たちの中には、問題を抱えて入ってくる人も多々あります。問題を解決するために演劇を選択した若者も、宗教を選択した若者も、基本的に一緒なんだと思います。

今、宗教の役割が重要な時代

宮林雄彦

山崎 先生のおっしゃるとおりなんです。我々僧侶は儀礼的なものに頼っています。また、そのことに振り回されている感がある。つまり若い人たちが「生きる」とは何?と投げかける疑問に対し、お寺が答えて

ないのではないか。だから若い人達がオウムのような団体に興味を持つてしまう。そのような問題意識は持っているんです。実は今年の3月に、婦教会を開催したんです。いわゆる仏教入門式なんですけど、若人対象に開催したんです。定員は50人だったのですが、開催後、ご意見を頂戴したら皆さん非常に感激していました。若い人達が宗教的な発心をもつと持つてるんじゃないかと改めて感じた次第です。

山崎 よく宗教が死んだというふうには言われませんが、僕もそう思うんです。現世がすべての世界になつちやつたんですよ。親の意向で良い学校に行くとか、良い会社に就職させるとか、金さえあれば良いとか、その世界がすべてになつちやつたんですよ。宮林 いわゆる欲ですよ。

山崎 そうなんです。僕は仏教が「葬式仏教」になつた事を良いと思うところがあるんです。僕の実家は浄土真宗なんですけど、おじいさんや近隣の人々が亡くなつた時に葬式をしてくれるわけですよ。その時にお坊さんが人が亡くなつて初七日から四十九日までの話をしてくれるわけですよ。「人間は死んだら何処へ行くのか」という疑問に対し、物語みたいに聞かされると、子供心に「この世界がすべてではないんだ。もっと大きな世界があるんだ」というものを感ぜられたんです。そのことと私が、演劇をやっているという事は割と近いんです。演劇を作る人間は、虚構の物語を作っているんです。そこが現代社会よりも遥かに自分たち

にとつて生き生き出来る世界なんです。その意味で演劇をやることは現実が全てではなく、もっと大きな世界でその瞬間生きています。そこで楽しかったり、嬉しかったり、救われたりつていう事が沢山あるんですよ。先ほどの話に戻りますが、現世がこの世のすべてだとすうつと教えられてきた若い世代は、息苦しいわけですよ。そこには癒しが無いと思うんです。



浄土宗神奈川教区青年会
宮林雄彦会長

「侶」とは?

~ 21世紀

劇作家
山崎哲氏

21世紀の「僧」

と想うんですよ。
宮林 まさに先生がおつしやつたとおり、昔は家に年寄りが出てお寺参りのときに地獄絵図を見せたり、そういう環境が確実にありました。おじいさんやおばあさんから、自然に「生き、死に」を学んだ環境がありました。しかし、核家族が進んで親は仕事で家にはいない。子供は勿論寂しいわけです。そんな環境だからこそ宗教の役割が重要になってくると思うんです。

山崎 今の若い世代と付き合っが一番感じることは、評価をされること。生懸命やってそれを評価されないこと。愕然としちゃうんです。僕は日本文学をやつたときから宗教が好きだったから結構宗教本を読んだりしました。結局法然とか親鸞系統などが好きなんですけれど、西行や良寛なども好きなんです。(彼らが実行された) 何もしないで一日中ぼんやりしていること、そういうこととてとても素敵なことなんだって僕も思ってる

ところがあるんですよ。「何もする必要は無いんだよ。唯そこにいれば良いんだよ。」とにかく若い世代に言わざるを得ない。僕はそういう生き方、そういう演劇をやりたいと思ってるんです。今の子供たちは、自分が何点もらったという具合に評価されることでアイデンティティーを築いているから、焦りながら生きています。常に緊張感のなかでギリギリ

なんですよ。そこに大きな落とし穴があると思うんです。そういう意味ではもっと大きな生き方、ゆったりした生き方へ戻していかないと、もう日々それとの戦いでですよ。
宮林 生活が変わって来て日本が変わろうとしている中で、私はそういうふうになっていく期待感を持っています。良い学校に入つて、良い会社就職して、良い人と結婚して、良い給料をもらって良い家に住んで、そんな価値観が変わっていくという期待感があるんです。
山崎 いや！僕はもう変わってるん



ところで、先生は「日本近代殺人史」という本を書かれましたが、「サカキバラ事件」や「テルクハノル事件」など若い人たちが狂氣的にドロップアウトしちゃうのは何故だと思いませんか？
山崎 結局家族。僕らの世代にはきちんと家庭が存在していたと思うんです。お父さんがいて、お母さんがいる。ところが今の若い世代の中では、自分のアイデンティティーを築いた場所が、家庭と思えなくなっている人が、すごく多いんですよ！そこで、一番大きな問題として避けて通れないのがオウムなんです。自分の起源を家庭だと思えない人たちは、やっぱり麻原のところへ流れ込むという事はあると思うんですよ。先日の池田小事件の犯人もやっぱり家族の中で上手い出来ない。家族を逸脱した人間が社会に出たって、人間関係を築けるわけがない。そういう傷を負った時、家庭が帰れる場所になつていないかというところ、なっていないかというところが無い。そうすると、恨みを晴らすみたいなことになつてしまふんです。それは特殊な事ではなく、今の子には非常に多

いと思うんです。風俗的に言うた、今若い人たちの間で占いが流行ったりしますよね。それは多分宗教的痕迹みたいなものが今の若い人たちの中にも残っているんですよ。しかし、それを「どういうこと」ってきちんと教えてくれる人がいなくなつたと思ふんです。僕なんかはそういう意味で言うと、仏教という痕跡が確実にあるんですよ。オウムで言うと麻原は、そういうニーズみたいなものに応えたいんですよ。彼の宗教観が正しいとは思いません。しかし、そういう道筋を彼が作ったことは事実なんです。僕らの世代は幼い頃、自然に宗教を学べた環境がありました。でも今の若い世代はきちんと教えられていないんです。だから麻原に出会った時、物凄なものに出会つたようなショックを受けたと思います。しかし、僕は受けたい。それはきちんと宗教観を学べた環境が過去にあったから

若い世代にもっと宗教との
であいを
山崎哲

「山崎哲氏プロフィール」

- 1946年 宮崎県に生まれる。
- 70年 広島大学文学部国文科中退。
唐十郎の主宰する劇団「状況劇場」に入団。
- 71年 劇団「つんばさしぎ」を結成。79年に解散するまで、「紅孔雀」「新選組始末記」など30本近くを書き、地方興行を精力的におこなう。
- 80年 劇団「転位・21」を結成。「うお傳説—立教大学助教授教え子殺人事件」「漂流家族—イエスの方舟事件」「子供の領分—金属バット殺人事件」など、現実起きた事件を素材に「犯罪フィールドノート」としての一連の作品を発表しはじめる。
- 82年 「うお傳説」「漂流家族」で第26回岸田國士戯曲賞を受賞。
- 87年 「エイリアンの手記」「ジロさんの憂鬱」「まことむすびの事件」で第21回紀伊國屋演劇賞を受賞。
- 94年 水戸芸術館運営委員の就任。同98年、退任。
現在、朝日カルチャースクールの講師、宮崎大学運営諮問委員などを努めるかわら、社会評論、テレビ出演などをおこなっている。
- 最近の舞台作品 「夏—横山やすしに捧げる」「東海道四谷怪談」「ゾンビな夜」など。
- 最近の著作 「(物語) 日本近代殺人史」(春秋社)「俳優になる方法」(青弓社・2月下旬刊)。

だと思っっています。少なくとも子どもたちの世代は全く信じてないですよ。演劇の世界でも最高学府を出た子があえて就職しないで、演劇を選んでいるケースはたくさんあるんです。ところが親は「お前を大学までやっただのに」というように未だに葛藤しちゃうわけですよ。だから今こそ大人のほうが、「色んな生き方があるんだよ」という事を肯定してあげるべきだと思います。そこが大きな意味での宗教の世界、もっと大きな世界に繋がっていくと思うんです。



宮林 実は私も浄土宗神奈川教区青年会会長をつとめるにあたり「邂逅創心」というテーマを掲げさせていだいたんですが、造語なんです。「邂逅」は「であい」。つまりであいが心を創るという意味なんです。なぜこ

僧侶としての使命感をもつ 宮林雄彦

の言葉をテーマとさせていたかという、今「であい」というチャンスはたくさんあるけれど、「であい」の意味を十分に捉えていない若者が増えている。私共も実は檀家さんとのふれあいがあるんですけど、それはおのりいっぺんになっている。それは本当の意味での「であい」ではありません。人は人とであることよって、豊かになる。だからもっと人とであい、それによって心豊かになる。ということ 키워ドにさせていただきます。

山崎 たしかに演劇の世界でも「であい」を求めに劇団から劇団へと渡り歩く若者が多いですよ。しかし、出合いを求めるだけでは駄目なんです。まさに宮林会長が言う邂逅し、心を創っていくという事が大事なんです。僕なんかやつぱり子供の頃の記憶で、神社やお寺の境内は人と人がであい交わる場所になってた訳ですよ。同時にこの世とあの世との境みたいなどころでした。そういう意味でお寺や神社は大きな役割を果たしていると思うんです。そこで人間の心が洗われて、普段の生活に帰っていく。そういう場所は必ず必要なんです。僕はカルチャーセンター等で教えたりしてやるんですけど、カルチャーセンターという場所自体も色んな人が出入りしている。そこで人と出会うこと、触れ合うことよって、自分をケアしながら、それでまた普段の生活の活用にしながら、癒しの場所として利用している。あらゆる領域でカルチャー



センターみたいなものをつくっていかうとしている。しかし、僕はやっぱり一番大きいのは宗教だところがあるんです。多種多様なもの、そこを手繰っていくと、実は宗教に出会わざるを得ないという回路になるという事にこだわると言くと、国

家とか社会というふうには、僕らは否応なく思っている所があるけれど、元をたどっていけば、「国家より、もともと宗教と出会って人類が歴史をつくってきたんだよ。もっともずっと深いんだよ宗教の世界は」ってことがあると思うんですけどね。ところがいまは国家だとか市民社会とか全部そうなっちゃってるじゃないですか。でもその所に息苦しさを感じてしまっている。では、なんだろうって言うときにそれはもとをたどっていくと、「宗教ってのはちよつとすごい」人間というのは国家とか社会は宗教的な世界と触れ合いながら存在してきたわけですよ。今はあくまで国家的な問題であって「人間は元をたどればもともと国家以前のところで、ずっと生きてきたんだ」っていうのがどうして僕の中であるものですか、最終的にはそういう開放の場所を作りながら非常に緩やかな世界へ帰っていくとすれば、それはやつぱり宗教的なものにならざるを得ないだろうなっておもっています。その時に「宗教は、応えてくれるだろうか」という所に、僕らからすると、求めてしまおうのだろうと思えますね。

宮林 正におっしゃるとおりで、実際に「応えてるか」ということに対して「応えている」というのはためらうんですよ。ところで先生から見て、特に我々青年僧がメッセージを伝えるにあたり、どの様な形が効果的だと思いますか？

山崎 どーなんでしよう。僕はとにかくお坊さんたちが自分が信じてる世界、信じてることをとにかく大事だと思っと思っています。それだけでいいんじゃないかと思っっていますよ。それを聞いてる側がこういう考え方があったり世界観があったりするだっというふうにふれる。そこで出会うんだと思うんです。それしかない。

宮林 信仰について語るといこと

ですね。
山崎 「そこはもうすごく自信をもって、自分の信念でとにかく語ってさえもらえればと思うんです。僕らはそれをきいて、「はっ」と気付く。そういう出会い方しか僕はないと思うんですよね。そこで自信を無くしてしゃべられたりすると、聞いてる方も不安になっちゃうから、本当に自信を持って自分の世界観・宗教観を語っていただくしかないんじゃないかっていう気がしますね。それでいいんだと思います。後は受け手の問題であって、いわゆるお寺の儀礼的な部分だけを



ることはもしかしたらその言葉なのかもしれない。」というふうに出会っていくんだと思うんですよ。そういう意味で言うと一番若い世代の欲しがっているのは言葉だと思ってるんですね。自分が思っていることを上手く言葉にできないわけですよ。感じてい

ることがどういうことなのかを考えると、いくつていうことなんですよ。今若い世代が欲しがっているのは言葉だと思えます。ですから、お坊さんが自分の言葉でしゃべってもらえればその言葉にふれるんです。そこで、出会っていきんだっていいことだと思ってるんです。僕は、非常に単純なんです。子供の頃、人間の死に直面した時、お坊さんから初七日から四十九日までこうやって転生していくんだよという物語に触れていく。「あつそうか。現世のなかにこんな世界があるのか」「宗教ってなに？人間が死ぬことってなに？生きる

30人の世界で、とにかくそこで言葉を発していつてそこで5人でも10人でも感じてくれるものがあればいいって思っているんです。そして、更にまた別の場所です。そういう人と出会って伝えていくっていいことしかないと思います。
宮林 本日は有意義な時間を過ごさせて頂きました。演劇と宗教、劇団と寺院、劇作家の先生と僧侶というのが非常に、共通点があると思えました。先生がおっしゃっている事が私にも伝わった気がします。本日先生

選択してつきあっている人もいるけれど、そうでない若い世代がたくさんいるわけですから、それを信じて「自分はこう思うんだけれど」とってお話を

かきつけて自分の感じてることを考えてい

くかという事が、ものすごい大きな問題になっていくんじゃないでしょうか。僕はもう半分諦めてるところがあつてワークシヨップやつても20

から頂戴した貴重なご意見を私の仲間である浄土宗の青年僧侶に伝えたいと思いますし、これからの事業にも活かしていきたいと思えます。本日は有難うございました。
平成13年6月

取材 編集委員会

仏教を自分の言葉で伝える ことごとごとが大事です 山崎 哲

して頂ければと思うんです。そこで聞く耳をもつ人は沢山いる訳ですから。自分が感じる事ってなかなか言葉にできないじゃないですか。そのときに初めて、お坊さんの語る言葉に触れるんだと思うんですね。「あつ。自分が思っ

県内浄青8組

平成13年度の活動予定

京浜組

会長 陣川隆行

平成十三年度 京浜浄青は、これまで活動の中心でありました野呂幸忍上人の御子息、野呂幸裕上人を新会員として迎えまして、スタートを切ることにになりました。若い力で、増々元気のいい組になるのではと期待がかけられます。

昨年度、組での研修会では、「浄土宗布教の現状および実際」と題しまして、第一線で御活躍されている日下部謙旨先生を御招きして、三回の研修会を行いました。御存知の通り、先生は私達浄青の世代であり、今この世代は、何を考え、行動しなくてはならないかを、布教の面から御教示下さり、「所求」「所帰」「去行」のあいまいな私達に“活”を入れて下さいました。

今年度の研修会も、浄土宗の第一線で御活躍中の同世代の先生を御招きし、実践的な法式の御教示をいただきたいと考えております。

そして、県の浄青には、会長をはじめ、事務局、会計を中心に位置する方々が京浜組から出ております。尚一層、県浄青の事業にも協力してまいりたいと考えております。

県浄青のメインテーマ「邂逅創心」（であいが心を創る）に示されますように、人とのであいは様々なものを得ることが出来ます。しかし、どんな人にあうよりも、自らが辱しいと反省させられる人にあうことが心を創るにおいて一番大切です。そのようなであいを求めて、今年度の活動に邁進してまいりますのでよろしくお願いたします。

港北組

会長 大橋定敏

早いもので、会長に就任してはや一年。昨年度は、会員の皆様の協力により、無事過ごすことが出来ました。

本年度は、昨年に引き続き、塩沢上人を講師に迎え、年5回の法式研修会を中心として活動して行きたいと思っております。港北組では、結婚式や晋山式等会員のお祝い事が続いており、尊い御縁を頂いて、お手伝いさせて頂いております。本年度も、晋山式の予定があり式に向けて会員一同勉強に励んで行きたいと思っております。また新規に家族親睦会を開催し、会員相互の親睦ばかりではなく、家族を含めての親睦を深めていきたいと思っております。そして平元上人が実行委員長を務め、情熱を傾けている海外仏教国小学生支援事業を初め、県浄青の活動にも積極的に参加し、研鑽を深めたいと思っております。

港南組

会長 石川覚順

港南浄青会長に就任して早一年が経過し、本年度も昨年同様に自行・化他・和合の活動方針の下、青年僧教師としての礎になるよう、地道な活動をしております。特に鎌倉浄青と合同開催の布教研修会は、昨年末をもちまして「選択集」を読了しました。引き続き柴田西彦先生にご教導頂ける運びとなり、年初より「四十八巻伝」の輪読を開始しました。毎月開催し、おおよそ四年程度の読了の計画です。元祖様の御遺徳を偲びつつ、その事跡を伺い、より布教活動に役立てることを目標としております。また和合の精神に基づき港北浄青会との合同親睦会をはじめとして各種懇親会も開催予定ですが、特に会員寺庭婦人だけの親睦会は青年会事業としての本義からは若干逸脱の感が拭えませんが、非常に好評であり、将来的に大と考え、本年は二回程度の開催を予定致しております。今後この事業の新たな展開を期待しております。 合掌

高座組

会長 斎藤良典

昨年度は神奈川県区ボーリング大会並び今年1月に行いました千仏礼拝会など浄青会員の皆様のご協力を得て無事円成することができました。一人ではなかなか行えないこと、たくさんの人が集まり互いに協力、助け合いながら行えることのありがたさを再び痛感いたしました。今年度も又、礼拝会を行い昨年参加出来なかった方々にも是非、礼拝のありがたさを味わっていただくべく開きたいと思っております。一方、高座浄青では浄土宗吉水流の詠唱会をひらき、仏教や法然上人の教えというものをお唱えを通して、味わって行たく、月1回のペースで開いております。詠歌・和讃を通して短かいながらも、それを題材にしたお話も、檀信徒の方々にも出来るでまいし、又法要の中においても、お経とは少し違った良さを味わえることと思っております。今年は、実際に私たちが仏事で使いやすい、お唱えを中心としておけいこして行こうと思っております。又、各地にある仏跡等の参拝も考えております。各会員の皆様もお時間があれば参加して下さいれば幸いと存じます。今年一年、今しかない、いつかを組会員一同精進して行きたく存じます。

第13期神浄青
マスコットキャラクター
“おさちゃん”

鎌倉組

会長 成田善俊

鎌倉組では、前年度からのテーマ「未来の教化へ向かって」のもと、今年度も自行研鑽を中心に行っていきたいと思います。昨年末に「選択集」の講読を終え、1月より「勅修御伝」を柴田哲彦先生に再度お願いして、月に1度行っています。また、引声法要の勉強を10年行っておりますが、今回新たに「六字誦念仏」のお稽古を杉浦定徳先生にお願いして、この5月より、月に1度行います。継続事業として三浦組と合同で「歳末助け合い托鉢」を本年も行います。

特別事業として、昨年行いました青龍寺での「六時礼讃法要」も会員諸氏から好評を得、今年度も青龍寺に赴き、「引声法要」を行いたいと思っています。(時期は未定)

新入会員も2名増え、研修の後の夕食会、暑気払い、忘年会等も積極的にを行い、より一層の親睦を深めていきたいと思えます。そして本年は神浄青の「北米開教区引声法要」があり、県主催の引声研修にも会員一同積極参加してまいります。今年度も鎌倉組青年会をどうぞ宜しくお願いいたします。

三浦組

会長 慶野匡文

三浦組から

皆様こんにちは。三浦組がいつもお世話になっております。今年度もよろしく申し上げます。さて、わが三浦組もここ数年で一気に世代交代となります。若手にこれといったものを伝えたいのですが、恥ずかしながら何も無いのが現状です。ただ法然上人のみ教えを正しくうけとり、正しく伝えていく、そのことだけは使命でありましょう。今年度も結局はそこがテーマであります。

法然上人のみ教えをいただいて、何かとやりたいことが多いのですが、まずはお念仏をお称えすること、それしかありません。そのお念仏をよりお称えさせていただけるように、引き続き布教、法式、引声という三本柱の研修・勉強をしていく予定です。とにかく勉強不足が否めないわが組ですので、どうぞ暖かく見守り、ご指導ください。

◎事業計画

(1)布教研修……昨年に続いての実演を取り入れての勉強。

- ①通夜・葬儀（浄土宗の廻向）
- ②彼岸・施餓鬼（浄土宗の受け取り）
- ③法然上人をお慕いして

(2)法式研修……日常勤行を中心に意外にアヤフヤな点を確認。(輪、命)

(3)引声研修……北米開教区引声法要奉修へむけて引き続き習礼。

(4)その他……バーベキュー大会、たくはつ、忘年会など。

中郡組

会長 宮澤正恭

平成12年度の中郡組青年会の活動は、例年にも増して多くの会員の協力・参加を得て全浄青、関ブロ、県浄青の各事業に積極的に参加させて頂くと共に、中郡組青年会内でもたいへん充実した事業を行うことができました。

(1)個々のアイデンティティー確立のための研修会（4月から毎日開催）

(2)高座組青年会とのフットサル大会

(3)家族親睦バーベキュー大会

(4)高座組青年会とのゴルフコンペ

(5)忘年会

(6)高座組青年会主催「千札仏名会」への参加

(7)中郡組青年会25周年記念事業（研修会・懇親会）

(8)活動報告『中浄青だより』の作成及び配布

特に、平成12年度は中郡組青年会発足25周年の記念すべき年度に当たりましたので、その記念事業として平成12年4月より毎月開催してきました「個々のアイデンティティー確立のための研修会」のご報告とその約1年間の成果をもとにテーブルディスカッション形式での研修会並びに懇親会を組内諸大徳をお招きして、本年4月27日に平塚の「パレスへいあん」に於いて開催致しました。この研修会では三つのテーマ（①世俗的価値観と僧侶的価値観の問題、②区別意識の問題、③相承の問題）ごとにテーブルに分れ、たいへん熱の入ったディスカッションが行われました。諸大徳の皆様から色々な経験談・体験談をお話し頂き、『三心』を本当に自身の中に持ち、自分自身を深く見つめなければならないことを改めて認識することができました。

平成13年度においては、前年通り全浄青、関ブロ、県浄青の各事業に積極的に参加させて頂くことは勿論のこと、中郡組青年会として以下の事業を予定しています。

(1)資質向上を目的とした研修会「仏式結婚式を広めよう」（毎月開催）（目標・パンフレットまで作成して各寺院で配布できるようにする。）、

(2)高座組青年会とのフットサル大会、

(3)家族親睦バーベキュー大会、

(4)忘年会または新年会、

(5)他組青年会主催の研修会等への参加、

(6)他組青年会との親睦会、

(7)活動報告『中浄青だより』の作成及び配布、

(8)その他

小田原組

会長 都築顕道

小浄青の会長を引受け早いもので、1年が経過しました。

昨年に引き続き、「次代づくり」をキーワードに活動して行きます。

本年も2名の新たな新入会員を迎え、若い世代の力を借りて積極的な浄青活動をして参ります。本年もどうぞ宜しくお願い致します。

事業活動紹介

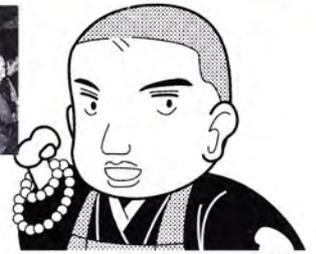
・法式勉強会・OB合同親睦会・家族会・歳末助け合い托鉢募金・忘年会



共にがんばりましょう!



平成12年度 神浄青 事業報告



平成12年度 事業 総括文

平成十二年度は「浄青神奈川」第二十七号で既に紹介の四大事業を機軸に、関プロ浄青関東三大本山別時念仏会・関東地区教化センター主催檀信徒大会という上部団体事業への協力、そして大本山光明寺清掃奉仕・ソフトボール大会開催・全体忘年会開催等の定例の事業、十夜街頭伝道を十夜托鉢に・御忌別時念仏会から御忌別時會として礼讃や礼拝を取り入れたものに・広報事業を増強して「浄青神奈川」を対外機関誌として新たに对内広報紙「NICE BOSE通信」を発刊、更にはホームページ等のデジタルツールの展開・等本年度からの試みの事業、など宮林会長の強力な牽引のもと諸事情を展開いたしました。また四大事業では、各委員会の開催が夏期僧堂企画委員会・八回・婦敬会実行委員会・八回・北米開教区引声法要奉修事業実行委員会・九回・海外仏教国小学生支援事業実行委員会・八回を数え、夏期僧堂が四十五名、婦敬会が三十二名の委員の参画のもと各々本年度無事終了いたしました。なお、委員会構成員は夏期僧堂企画委員会が担当副会長長渡部・委員長大橋・井村・石川(参)・井上・野口・曾我・成田(善)・清水(道)・斎藤(匡)・相馬(正)・成田(昌)、婦敬会実行委員会が担当副会長夏見・実行委員長斎藤(匡)、副実行委員長斎藤(良)、同曾我・加藤・大橋・石川(参)・吉田(佳)・慶野・相馬(正)・小山・佐々木(元)・岩崎の各上人でした。この場を借り報告いたします。

平成12年度 神浄青事業報告

月日	場所	内容	参加者数
● 4月21日	大本山光明寺	定期総会	53名
● 7月4日	大本山光明寺	大本山光明寺開山忌前清掃奉仕	40名
● 7月28日～30日	大本山光明寺	第54回夏期僧堂(関東地区教化センター神奈川教区事業)参画	45名
● 10月3日	江ノ島ボウリングセンター	第18回ソフトボール(雨天のためボーリング)大会(高座組担当)	57名
● 10月3日	湘南ホテル	第18回ソフトボール(雨天のためボーリング)大会(高座組担当)懇親会	58名
● 10月10日	大本山光明寺	大本山光明寺十夜前清掃奉仕	34名
● 10月13日	大本山光明寺	関プロ浄青関東三大本山別時念仏会協力	22名
● 10月14日	大本山光明寺	十夜托鉢	8名
● 10月23日	ハマボウルパッティングセンター	第18回関プロ浄青スポーツ交流大会事前練習会	7名
● 12月4日	中華街「同發」別館	全体忘年会	41名
● 1月24日	大本山光明寺	御忌別時會(含、神浄青関係遷化上人回向)	47名
● 1月24日	「和民」鎌倉駅前店	御忌別時會慰労会並びに新年会	23名
● 3月3日	大本山光明寺	婦敬会	32名





神淨青 事業計画

ソフトボール開催地決定 13年度神淨青ソフトボール大会

今年度の神淨青ソフトボール大会は、鎌倉組担当で11月19日(月)に深沢多目的スポーツ広場(鎌倉市寺分字陣出)で行います。今年は日程上、関プロソフトより後になってしまいました。

11月の半ばということもあり、少し寒いかもありません。が、しかし、私達は青年会、若さで頑張りましょう。昨年は前日の雨天でボーリングになりました。今年は是非晴れになってもらう事を皆で祈りつつ、晴天のもとソフトボールで汗を流しましょう。又、懇親会は大船のホテル「好養」で行います。あくまで鎌倉組はお座敷にこだわり、密着した宴会で神淨青会員一同の親睦を深めたいと思っております。どうぞ皆様大いに期待をしてください。鎌倉組ではソフトボール大会委員会を作り、ソフト、親睦会ともに充実した内容で臨めるよう今から準備を進めています。各組大人数での参加を心よりお待ちしております。

鎌倉組会長 成田善俊



深沢多目的スポーツ広場

平成13年度 総会報告

平成十二年度の神淨青総会が四月二十三日(月)十五時より、大本山光明寺を会場に会員総数百二十八名中、出席者四十二名、委任状六十二名、合計百四名により成立・開催された。

先ず、大殿にて宮林会長の導師のもと御願がなされ、開会に先立ち稗貫教化団長から御挨拶を頂戴して、開会となった。会長の挨拶の後、議長に会長を選任して議案審議に移り、定足数の確認・資料の確認・議事録作成人の指名の後、平成十二年度事業報告及び決算、平成十三年度事業計画及び予算が承認され議案審議を終了した。

続いて全淨青から各組淨青に渡る各段階の淨青の事業報告・計画の発表がなされ、特に各組淨青の発表では各々のユニークさが随所に現れ、会場はとても和やかなムードであった。引き続き平成十二年度卒業会員の卒業式並びに平成十三年度新入会員の入会式が行われ、卒業会員は残念ながら全員欠席であったが、新入会員は野呂・香川・稲見・酒井・大室の五上人が出席され、全員が会長より記念品を贈呈され、各自一言づつ抱負を語り会場を埋めた会員から盛大な拍手を受けた。最後に杉浦監事より総会全体への総括が語られ、無事閉会となった。



平成13年度 神淨青事業計画

月日	場所	内容
4月23日	大本山光明寺	定期総会
7月4日	大本山光明寺	大本山光明寺開山忌前清掃奉仕
9月8日	北米開教区	北米開教区引声法要奉修事業、
10月13日	北米浄土院別院	北米浄土院別院 引声法要実施
11月19日	鎌倉市深沢多目的スポーツ広場	第19回ソフトボール大会

(担当 鎌倉組)

月日	場所	内容
12月12日(友前)	場所未定	臨時総会
12月12日(友前)	場所未定	全体忘年会
1月24日	大本山光明寺	御忌別時會
2月11日~15日	タイ王国プリラム地方	海外仏教国小学生支援事業、校舎完成式参列

参考資料

月日	場所	内容
6月19日~20日	大本山増上寺光優殿・東京プリンスホテル	第29回関プロ淨青総会並びに研修会(東京教区)
8月28日	名古屋駅「ホテル マリオットアソシア」	第31回全淨青中央研修会(東海ブロック尾張教区)
9月17日	大本山善光寺	関プロ淨青関東三大本山別時念仏會
11月12日~13日	東京都内	第19回関プロ淨青スポーツ交流大会(東京教区)
2月18日~19日	仙台市内	全淨青代表者研修會
4月6日	大本山増上寺	関プロ淨青関東三大本山 別時念仏會
・編集委員会 事業計画		
7月1日	対外誌「淨青神奈川」	第28号発行
10月2日	対内紙「NICE BOSE 通信」	第4号発行
12月12日	対内紙「NICE BOSE 通信」	第5号発行
3月中旬	対内紙「NICE BOSE 通信」	第5号発行

新入会員紹介

— 21世紀は君たちの時代だ! —



佐藤孝雄
鎌倉組高德院



滝川正人
高座組専念寺



香川陽祐
高座組増全寺



鈴木雄心
港北組心行寺



野呂幸裕
京浜組教安寺



皆川演亮
小田原組城前寺



阿川貫浄
小田原組常光寺



酒井仁成
中郡組正安寺



大室了寛
中郡組三福寺



稲見公宏
鎌倉組覚栄寺



高麗清貴
三浦組光念寺



鈴木明德
三浦組永楽寺



伊藤俊一
高座組仏導寺



植村万里
京浜組相応寺

早いもので、浄青にお世話になりましたから二十年もの年月が過ぎました。在家出身であり、養成講座出の、お寺になじみ薄かった私が、浄青を通じ、色々な事を学ばせて頂きました事、大変感謝致しております。

— 卒業にあたって —

卒業会員紹介

多くの思い出がありますが、他宗団見学も印象深いもの一つであります。普通では体験出来ない他宗団の片鱗を垣間見ることが出来、大変良い経験させて頂きました。また各種記念行事にも、色々な形で参加させて頂きました事も、楽しい思い出です。多くの先生方の記念講演も拝聴させて頂きました。中でも、丸山浩路先生の講話は、手話を混じえたものでありとても印象深いものでした。最近では、様々な分野で手話を取り入れられてますが、当時の私にとって初めての体験でした。障害を持たれた方々への配慮等、考えさせられ、多くの事を学ばせて頂きました。また、金沢母子寮への花祭りプレゼント・帰敬会・そして最近では、ハワイ開教区での引声法要厳修等々、大変身になる思い出もございました。

どうぞ皆様の親睦をより深められ、浄青ならではの動き易くて、色々な経験をされ、ご活躍されます様念じてさせて頂きます。 合掌

卒業生代表
三浦組光念寺 高麗清貴

今後とも御指導下さい! (現会員一同)

編集後記

大 いよいよ「選定創心編集委員会」も2年目を迎えますね!

成 昨年度はがんばりました。涙・涙の1年でした。

菊 涙と言えば帰敬会だよ

小 俺も取材しながら泣いちゃだよ

松 僕は、小さんの結婚式で泣きましたよ

水 ところで、宮会長に「ナイス・ガイ」って言われた編集メンバーいるのか?

相 「ナイス」までは、言われましたけど「ナイス・ガイ」までは……

長 また、だれもそのお言葉頂戴してないんだ? よーし! 13年度こそ努力精進してそのお言葉を頂戴しよう

三 一同 ウッシャー!

元 すいません もう外明るいっすけど…… 一同 沈黙

編集委員会では平成13年度も引き続き皆様へ愛される紙面作りを目指しがんばります。また、対内紙「NICE BOSE 通信」ならびに神浄青ホームページも御愛顧下さいます様御願ひ申し上げます。 編集委員会一同

